



■写真1[前頁上]—野方給水塔、街の顔として親しまれている
 ■写真2[前頁下]—生活道路となっている荒玉水道道路
 ■写真3[左上]—水の塔公園にたたずむ野方給水塔
 ■写真4[右下]—取り壊しが決まっている大谷口給水塔

荒玉水道と給水塔

The Aratama Waterworks and Water-tower

宮沢 規

MIYAZAWA Tadashi

株式会社 東京建設コンサルタント
技術第一部



1—都内に残る水の遺産

普段何気なく飲んでいる水。日本は世界で数少ない水道水のきれいな国である。蛇口をひねって出てきた水を、何も心配することなく飲むことができる。昨今では水を買って飲む人も増えてはきたが、それでも安心して飲める水が、いつでも手に入るというインフラ整備は世界に誇るべきことであり、同時にこの“当たり前”には、多くの技術と努力が刻まれていることを忘れてはならない。

今回は、都内にひっそりとたたずむ、“水の遺産”を紹介したい。

2—荒玉水道

くねくねと折れ曲がった道路の多い東京の中で、ひときわ目立つまっすぐな道がある。世田谷区喜多見から杉並区高円寺付近までの直線道路。もし手元に道路地図があるのなら、見ていただくと分かるであろう。

「荒玉水道道路」と呼ばれ「道路」ではあるのだが、この道は車のために作られたものではない。そのせいもあってか、一方通行だったり、通行規制のためのポストが立てられていたり、直線道路のわりには決して通りやすい道ではない。そのうえところどころに「総重量4トン以上の通行禁止」の看板が設けられている。

そう、この道は上水の送水管布設のために作られた“スペース”であり、車両の通行ができるようになったのは昭和37年からということだ。

荒玉水道の「荒」は荒川を、「玉」は多摩川を示す言葉である。



大正12年の関東大震災後、東京市に隣接した町村の急速な都市化による水の需要に応えるために、奥多摩・北豊島両郡にある13の町村が組合を作り、多摩川(玉川)と荒川を結ぶ上水道を建設することになった。しかし実際には多摩川と荒川は結ばれておらず、多摩川を水源とする世田谷区の砧浄水所から中野区の野方給水所をへて、板橋区の大谷口給水所までの1期工事で終わっている。

荒玉水道は、大正14年4月に着工し、昭和6年9月に竣工。管径1.1mの鉄管で総延長約17km、現在の金額に換算すると115億円の大作であった。

3—2つの給水塔

荒玉水道には2つの給水塔がある。中野区江古田にある野方給水塔と板橋区大谷口にある大谷口給水塔。この瓜二つの給水塔は実のところ、同じ人物が同じ時期に設計しており、設計図からまったく同じデザインであることが分かる。

設計は「近代衛生工学の父」といわれた東京帝国大学名誉教授、中島鋭治によるもので、都内に残るもうひとつの古い給水所、世田谷区弦巻にある駒沢給水所*の設計も手がけている。

いずれも現在は給水塔として使用されておらず、野方給水塔は防火用水として、また大谷口給水塔は取り壊しが決まっている。2つの給水塔は本来の役目を終えているが、“水道タンク”、“みずの塔”などと親しまれ、街の顔として愛されている。

4—残すことの意味

大谷口給水塔の撮影をしていると、近くを親子が通りがかった。「この水道タンクなくなっちゃうんだよね」母親が自

分に言い聞かせるように、娘に話しかけていた。当たり前風景が変わってしまうことは、慣れ親しんだ人にとって、なんだか悲しいことである。

ドイツ・ケルンにあるホテル、イム・ヴァッサートゥルムは、役目を終えた給水塔を改築したものだ。技術は進歩して行かなければならないものであるが、かつての技術者に敬意を表し、遺産として“残してゆく技術”も、心を豊かにしてゆく上で大切なことではないだろうか。

〈資料提供〉
設計図：東京都水道歴史館

〈参考資料〉
ホテル・イム・ヴァッサートゥルム
<http://www.hotel-im-wasserturm.de/>

〈写真：筆者〉

*双子の配水塔がランドマークになっている

